

教員養成課程のダンス授業における指導のねらい：
授業担当教員へのインタビュー調査より

杉山 りん（お茶の水女子大学大学）

1. 研究背景・目的

中学校1,2年生の保健体育科でダンス授業が必修化されて10年以上が経過し、ダンス授業の指導力の基礎を育成する、教員養成課程が担う役割は大きいと言える。山口ら（2025）は、教員養成課程のダンス授業受講生を対象に授業の効果を検証しており、受講生のダンスイメージの変化が示された。しかしながら、それらダンス授業の指導に当たる教師教育者を対象とした研究は多く見られない。そこで本研究は、保健体育科のダンス授業充実のために、教員養成課程のダンス授業ではどのような指導が行われているのかを教師教育者である授業担当教員の視点から明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

関東圏の大学3校（大学A、大学B、大学C）を対象に、半期にわたる参与観察および、それぞれの担当教員に授業のねらいについてインタビュー調査を実施した。得られたデータはSCATを用いて分析した。なお、大学Aは学習指導要領に沿った授業、大学Bはボディワークを取り入れつつ学習指導要領の内容を抽出した授業、大学Cはコンテンポラリーダンスのダンサー・振付家である担当教員による、ダンステクニックに基づいた授業が行われていた。

3. 結果

分析結果として生成されたストーリー・ラインおよび理論記述からは、各教員がねらいとしていた内容が次のように示された。（一部抜粋・要約）
※〈〉は生成されたテーマ・構成概念

【教員A】受講学生が〈ダンスの特色のより深い体感〉を得て、〈自ら指導することへの発展〉のために、〈指導を見据えた学習指導要領の内容の具現化〉を意識して指導していた。授業計画としては〈自由度の高い創作ダンスと現代的なリズムのダンス〉に比重を置きながら授業を行った。フォークダンスについては、〈慎重さが求められるジェンダーに関わる課題〉を気に掛けつつも、実際は〈未整理のままのフォークダンス実施〉がなされ、〈教師教育者としての反省〉がみられた。

【教員B】教員免許取得を目指す学生が〈自分の糧〉にできるような〈ステップやストレッチの方法と効果〉や〈創作活動の方法〉を、〈客観視の獲得〉や〈表現の増幅〉をねらいとして組み込んでいた。授業を通して〈ダンスの要点がちりばめである〉ように計画されており、〈学生個々の学習目標〉に向かうような〈自発的な学び〉を促してい

た。受講によって〈ダンスとの距離感の接近〉がなされており、教員Bは〈ダンスのアウトプットできる材料の増加を期待〉していたが、学生は〈達成感と自信を主に獲得〉したと感じているようである。

【教員C】教員養成課程のダンス授業でありつつも、〈学校のダンス授業の枠組みにとらわれない授業構成〉で授業を展開していた。授業では〈言語化による外在化〉によって学生が〈身体の使い方の定着〉や、〈身体的な記憶や感覚への着目〉ができるように〈呼吸と身体の重さの知覚と獲得〉を促していた。指導者の養成という点においては、〈体ほぐしの要素に注目した授業〉を行っていた。授業計画においては〈学校教育とのギャップにおける指導の難しさ〉を感じつつも、〈学生の意欲レベルに対応した指導〉や〈学習の積み重ねを昇華する〉機会を確保していた。

4. 考察

いずれの教員も見せ合いや発表の機会を設けていたが、その活動のねらいはダンスの特色の体感、客観視の獲得、学習の積み重ねの昇華と様々であった。また、教員Aおよび教員Bは、学生が受講する立場としてダンスに親しむ機会を設けつつも、教壇に立つことを見据えて、指導方法や言葉かけ、教材の提示を行いつつ授業を進めていたことが読み取れる。その一方で教員Cはダンスに親しむだけではなく、自他の身体そのものに集中する機会を多く設けていたことがわかる。保健体育科教員を養成する授業として、前者はダンス授業の具体的な方策を指導しており、後者は保健体育科を担う教員としてより身体感覚に鋭敏になることが期待できる指導内容であったと言える。この、運動を行う身体そのものについての学びは、ダンスに限らず、保健体育科の他領域にも繋がる応用可能性が期待できる。いずれの指導内容も保健体育科教員としてダンスを指導する上では欠かせないと考えられるが、半期15回の授業の中ですべてを網羅することは困難である。これらの指導方法を教員養成の選択肢として多様に用意しつつ、学生や教員のバックグラウンドに応じて取捨選択しながら授業を計画することで、学生にとって指導を見据えた学びに繋がると考えられる。

主要参考文献

山口 晏奈ほか(2025)「主体的・対話的な学び」を促すダンス授業の検討：体育系大学生を対象として、大阪体育大学紀要. 56, 149-160.

大谷 尚(2008)4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学. 54(2), 27-44.